

「滿洲開拓」をめぐる現地社会の 人々の記憶と語り

趙彦民

从 1932 年至 1945 年日本战败为止，在日本殖民地统治政策下，日本对中国东北地区推行移民计划、约有 27 万人的日本农业移民以“开拓团”的形式被送往到东北各地。日本殖民地统治下的东北社会成为日本人、朝鲜人、中国人等多民族的共同生活空间。本文主要目的是对被纳入到统治与被统治的殖民地社会构造底层的日本农业移民与当地中国人在日常生活中建立的民族关系、特别是作为被压迫者的当地中国人与日本农业移民者的互动过程中形成的人生经历进行思考和分析。

具体地说：本文以长野县第七次信浓村开拓团的移住地黑龙江省延寿县中和镇及其周边作为田野调查地域，围绕“满洲开拓”这一历史事件，考察日本殖民地统治时期的中国东北社会当地人的记忆和叙述，探讨殖民地统治与被统治的社会构造中、当地的中国人与日本农业移民者之间的相互关系。

针对以上问题意识本文的考察结果总结为以下两点。

(1)在日本对东北社会的殖民地统治时期，对生活在东北社会的当地人们来说，一面饱受日本殖民地统治的压榨，一面艰难的生存。在此巨大的生存压力下，他们为了寻求“安定的生活”、为了躲避繁重的劳役，他们或作为移住到东北社会日本开拓团的劳动力、或成为殖民地统治者的“合作者”，利用有限的选择生存下去。对此，日本农业移民者所叙述的“他们没有工作”“他们很高兴能到日本的开拓团里劳动”这一评价只不过是现地的中国劳动者在日本开拓团生活的动机的一个侧面。

(2)另一方面，殖民地社会通常是支配与被支配的对立构造，但从本文的事例中可以看出：当地的中国农民在与日本农业移民者的个体交往互动过程

中并不完全是一种对立的关系，二者之间也存在有良好的关系。这种个体间的交流与互动形成的良好关系也是战败后日本移民者摆脱难民生活困境的一个重要因素。当地中国劳动者在叙述与日本移民的这种关系时，大体上没有把殖民地社会这种统治与被统治的社会构造为前提，而是结合个体间的交流经历进行讲述的。但值得注意的是，在个体间良好交流经历的背后，因为殖民政策而导致的压迫也是不容抹杀的。

はじめに

本論は、長野県第七次中和鎮信濃村開拓団（以下は中和開拓団と略す）の入植地であった中和鎮とその周辺をフィールドとして、「満洲開拓」⁽¹⁾をめぐる現地社会の人々の記憶と語りに焦点を当て、彼らと日本人移民者との相互関係について検討するものである。

1932年から1945年の終戦までには日本帝国による満洲支配の下で、約27万人の日本人農業移民が様々な形でソ満の国境や抗日活動の激しい地域に入植させられた⁽²⁾。このような日本の植民地主義の下に置かれた満洲は日本人、「朝鮮人」、中国人などの人々が出会う場となった。満洲を支配する側とされる側の末端に組み込まれていた日本人農業移民と現地の人々がどのような関係で暮らしていたか、特に支配される側に立つ現地の人々は日本人の入植者との相互作用なかでどのような経験をしたかが、本論の主な課題である。

このような満洲移民と他民族との関係に関する先行研究の蓄積は、それほど多くはないが、主に歴史学と社会学という二つの分野で扱われてきた。歴史学の分野では、1970年代に発表された依田憲家の論考が注目される。

(1) 「満洲開拓」「満洲移民」「満洲国」「満洲」などは以下括弧をとって表記する。

(2) 満洲移民の送出形態から見れば、試験（武装）移民団、自由・分散・自警移民団、全県編成移民団、分村移民開拓団、分郷移民開拓団、集合・農工婦農開拓団、報国農場、創設期の義勇隊開拓団、全国混合編成義勇隊、長野県単独義勇隊開拓団、訓練途上の義勇隊・義勇軍などに分類することができる。

依田は満洲における日本人、中国人、「朝鮮人」との関係を課題とし、とりわけ満洲に対する「朝鮮人」移民のプロセスとその実態に着目して考察し、日本帝国主義による中国侵略の本格化につれて一時的に中国人と「朝鮮人」の関係の悪化をもたらし、そして日本帝国主義の満洲占領によって「朝鮮人」移民の直接的圧迫に転化したことを明らかにしている（依田熹家 1976: 491-603）。このような歴史学の研究を踏まえ、1990年代以降には、社会学の分野において、まず蘭信三は、満洲に送り出された日本人の民族体験と民族意識について、彼らへの聞き取り調査のデータなどに基づいた分析から「国家間の力関係やステレオ・タイプによってあまり左右されず、個々の具体的接触によって規定されていた」（蘭信三 1994: 301-302）という結論を導いている。すなわち、蘭はこれまでの歴史学研究で指摘された民族的・階級的対立という視点を共有しながらも、満洲移民の民族体験と民族意識がそれに大きく規定されることはなく、日本人の移民者と現地の中国人や「朝鮮人」という「個々人の具体的接触」のなかで形成されていたことを明らかにしている。

一方、これらの研究に対して、猪股は岐阜県郡上村開拓団を事例に、元開拓団の関係者への聞き取り調査と既存の記録資料などを駆使しながら、開拓団の営農形態と流通機構という二つの側面に焦点を当て再考を行った。その結果、満洲移民と他民族との関係は旧来の歴史学で指摘された開拓団の経営形態による民族的・階級的対立だけではなく、開拓団特有の流通機構という経済の仕組みが日本人の移民者と周辺中国社会との接触を断ちかったということを明らかにしている（猪股祐介 2002: 17）。

こうした研究のほかに、坂部晶子（2008）『「満洲」経験の社会学』があげられる。本書は日本人の農業移民者を中心とした研究ではないが、「満洲国」という植民地の経験を、日本人の植民者の記憶と植民される側である中国東北社会における記憶という支配者—被支配者、構造的強者—弱者の枠組みのなかでとらえなおし、双方の記憶と語りについて分析し、ナショナルな記憶としての統合の圧力とその圧力との葛藤を示しながら、一元的

な歴史の語りにも抗した多声的な記憶の可能性を示唆している（坂部 2008：231-234）。

以上で取り上げた研究成果は、ほとんど植民地支配する側である日本人移民者に着目して論じられたものであるが、坂部の研究は支配する側とされる側の双方の考察を行った論考として注目される。そこで、支配される側に焦点を当てるといふ坂部の研究と共有視点を持つ本論は、坂部のように東北社会における満洲に関する集合的記憶の変遷や、特定地域における満洲に対する集合的記憶の生成過程の解明などについてではなく、本論で取り上げた中和開拓団と現地の中国人との相互関係に限定して検討する。

本論では、かつて中和開拓団に雇用されていた中国人労働者、あるいは中和開拓団の建設に強制労働を強いられた中国人労働者への聞き取りをもとに、支配される側の現地の中国社会に暮らしていた中国人の視点から、中国人と支配者として現地に入植してきた日本人とが日常の暮らしのなかでどのような関係を結んでいたかを検討する。すなわち、日本人による満洲支配のなかで、現地の人々はいかに生きたのか、そして個々人の満洲体験をどのように記憶し、どのように語っているのかを明らかにしていきたい。

以下では、まずフィールド調査地である中和鎮と慶陽農場について概観したあと、聞き取り調査に協力してくれたインフォーマントを紹介する。そして、満洲開拓をめぐるそれぞれの事例を述べたうえで、最後に考察を行う。

1. フィールド調査地の中和鎮と慶陽農場

中和開拓団は長野県全域にわたって団員を応募し、県を母体として送出された全県編成移民団であった。1938年に、「滨江省」延寿県の東部に位置する中和鎮に入植した（図1、図2を参照）。中和鎮の街より東へ約4キロ離れた場所に本部が設置され、各部落は中和鎮の東側に点在していた。

「満洲開拓」をめぐる現地社会の人々の記憶と語り

図1 ハルビンとその周辺の地域図

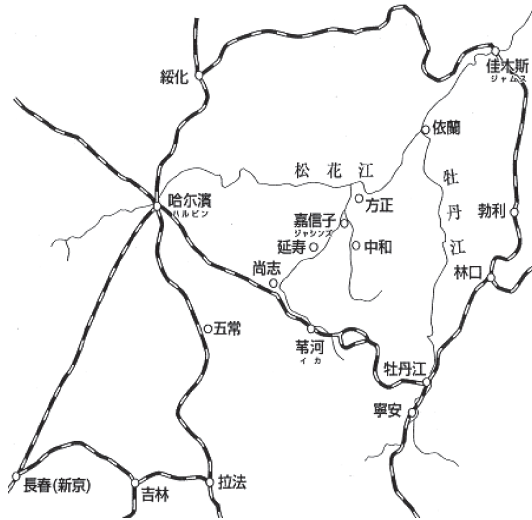
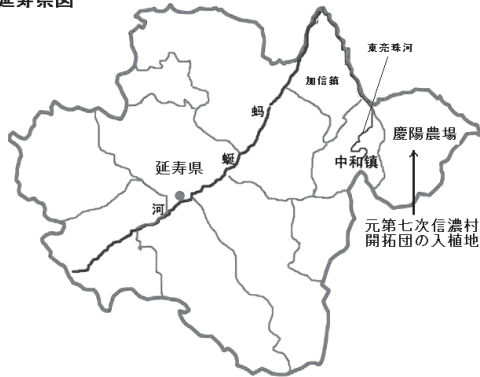


図2 現在の延寿県全域図

延寿県図



1945年8月、日本の敗戦と共に中和開拓団は崩壊した。1946年1月、共産党軍の359旅（旅は旧時の軍隊編制）が延寿県を解放し、同年6月以降に共産党の支配地域となった（姜新志 2003：7）。翌年の1947年、松江省政府

は、経済の繁栄、政府収入の増加、人民負担の軽減、そして戦争のために農業を発展させ、実験的に農業の機械化を進めていくために、元中和開拓団の跡を基盤に松江省第一号の農場を建設すると決定した（慶陽農場誌編審委員会 2002：7）。1953年には黒龍江省政府の指示により、農場は「黒龍江省国営慶陽農場」（以下は慶陽農場と略す）と命名された（慶陽農場誌編審委員会 2002：27）。

1-1. 現在の中和鎮の概況

中和鎮は延寿県城の東部に位置し、尚志市、方正県境に接している（図1を参照）。延寿県城から約65キロあり、総面積は134平方キロで、人口は約13000人である。耕地面積は約5330haであり、そのうち、水田面積は約4666haを占めている⁽³⁾。中和鎮は米の生産を中心とした農業の町であったゆえに、延寿県内において暮らしやすい地域の一つであった。

90年代の後半に入ってから、中和鎮に通信設備が整備され、家庭電話の普及率は90%に達し、携帯電話の使用率も60%に上っている。また、町には光ケーブルも敷設され、農村社会におけるインターネットの利用はもはや神話ではなくなっている。街中には「電腦教室（パソコン教室）」や「網吧（インターネットカフェ）」の看板が立ち並んでいる。こうした情報化社会の到来は、農村社会に大きな変化をもたらした。

これまでのように農村社会に留まって一生農業に従事するというような意識はだんだん薄くなってきている。土地を賃貸して、出稼ぎにいく農民が多く見られる。中和鎮には、朝鮮族、日本人関係者が最も多く、特に朝鮮族のネットワークや日本人関係者のネットワークを利用して、韓国、日本への国際移動が著しく見られる。町の中心部から約4キロ離れている「先鋒村」という朝鮮族集落は「村の若い人はほとんど韓国へ出稼ぎに行っている。村には老人だけが残されている。村の農業による収入は土地の賃

(3) <http://www.hlyanshou.gov.cn/zhaonghe.htm> (2005年5月13日閲覧)。

貸料だけだが、外国からの送金による個人の平均収入はほかの村により遥かに超えている」⁽⁴⁾と中和鎮の幹部は説明する。

中和鎮の朝鮮族の人々は、中和開拓団が中和鎮に入植する前、既に中和境内に居住していた。当初、吉林省が発布した条例に「外僑と朝鮮から移住してきた人々は土地を所有することを認められない」（元弘基，張一新 1998：33）と記されていたので、多くの朝鮮の人々は漢族の人から土地を借りて生活を営んでいた。日本人が入植してきてからは、中国人の地主が所有していた土地はほとんど満拓公社により取り上げられた。「朝鮮人」は、中国人の小作人から日本人の小作人変わった。

一方、中和鎮と日本との接点については、1946年に中和開拓団が引揚げたあと、中和鎮の周辺に残留した該団の関係者が多数存在し、その数は「100人以上を超えた」（元中和鎮信濃村開拓団 1975：297）とも記録されている。当時の外僑登録申請書の記録によれば、1953年に再開された集団引揚げでは、日本人 116 名が日本に引揚げたが、特に中和鎮周辺の残留者が最も多かった⁽⁵⁾。そして、1958年に集団引揚げが終了したあとも、様々な事情により引揚げられずに、中和鎮に取り残された日本人孤児や婦人が多く存在していた。1972年に日中国交が回復したあと、残留者とそれらの家族による日本への帰国、元開拓団の関係者による現地への訪問などにより、再び中和鎮と長野県の関係が深まった（趙彦民 2007：202-208）。

1-2. 慶陽農場——第七次信濃村開拓団の入植地

慶陽農場は、先に述べたように、元々中和開拓団跡地に建設された中国の国営農場である。農場の立地はほぼ当時の中和開拓団の配置をそのまま利用しており、本部と八つの作業区に分かれている。現在慶陽農場の本部に約 4000 人、八つの作業区に 4300 人、計 8300 人の住民が暮らしている⁽⁶⁾。

(4) 2005年4月2日、中和鎮政府の幹部への聞き取り調査より。

(5) 2004年4月1日—8日、2005年3月29日—4月5日、2008年3月8日—3月10日延寿县で収集した資料の統計による。

1945年8月、開拓団の日本人が引揚げたあと、中和鎮とその周辺にいた少数の農民たちがそこに移ってきて、小さな村落が形成された。1947年には、延寿県政府は農業技術者たちを派遣し、元中和開拓団の五区で小規模モデル農場を建設し始めた。1950年になると、元中和開拓団の本部を農場の本部として規模を拡大しつつ、当時の中和開拓団が所有した土地の一部（3区、2区、4区、5区）を管理して、農業経営を行ってきた（慶陽農場誌編審委員会2002：26）。1953年には黒龍江省政府の指令で、これらの農場は統合され、「国营慶陽農場」となった。

このような背景があるので、現在農場に居住している住民は、僅かな地元の出身者を除いて、ほとんどが他の地域から移ってきた人々である。漢民族を中心とした住民のほかには、朝鮮族、満族などといった少数民族の人々、そして戦後残留となった日本人などの外国人から構成されていた（慶陽農場誌編審委員会2002：127）。日本人に関しては、例えば、80年代に日本への永住帰国を果たすまでずっとこの農場で暮らしていた残留孤児のIさんの事例や、亡くなるまでこの地で生活していた残留婦人の未帰還者である下平節子さんの事例があった⁽⁷⁾。一方、元中和開拓団の団員やその関係者らは、日中国交が回復されてから、1981年、1982年、1986年、2000年の四回にわたって訪中団を組織し、慶陽農場を訪問した。こういった残留日本人の存在、日中国交正常化以降の元中和開拓団の現地訪問により、信濃村開拓団を送り出した長野県という地域とかつて入植地だった慶陽農場との地方レベルの交流が続いてきた。

1-3. 調査対象者

以上のような調査地の背景を踏まえ、筆者は満洲国時代当時の中和開拓団とかかわっていた中国人労働者への聞き取り調査のため、2004年、2005

(6) 2004年4月2日、慶陽農場の胡順潔農場長へのインタビュー調査による。

(7) Iさん、下平節子さんの事例に関しては、拙著（2006）「ある中国残留孤児のライフ・ヒストリー」『アジア遊学』85、勉誠出版、37-48頁；拙著（2010）『「満洲移民」の歴史と生活体験』、247-259頁を参照されたい。

年、2008年の三回にわたって中和鎮と慶陽農場を訪ねた。中和鎮では、終戦まで中和開拓団で働いていたAさん、Cさんにインタビューをした。慶陽農場ではBさんに出会った。Bさんは中和開拓団で働いた経験がないが、当時の中和開拓団の用水路が建設された時に強制労働をさせられた多くの労務者のなかの一人だった。以下では、現地でも暮らしている3人の老人へのインタビューに基づいて、日本が満洲を支配していた時代における、彼らと日本人移民の民族関係を見てみたい。

表1 調査対象者

調査対象者	出生年	年齢*	調査日時	調査場所	備考
Aさん	1914年	91歳	2005.3.30, 2005.4.5	中和鎮	山東省からの移民
Bさん	1926年	78歳	2004.8.23, 2005.4.2	慶陽農場	延寿県東関村出身
Cさん	1920年	85歳	2005.4.3	中和鎮	中和鎮出身

(* 調査時点の年齢)

2. 満洲開拓をめぐる現地社会の人々の経験

2-1. 中和開拓団の「苦力」として——Aさんの事例

生い立ちから東北への移民まで

2005年の聞き取り調査の時点で、Aさんは91歳の老人だった。Aさんは、1914年2月4日、山東省に生まれ、代々ずっと農業を営んでいた。当時の家庭は、両親と叔父（父親の弟）、Aさんとあわせて4人で暮らしていたという。その頃の生活について、Aさんは「家は土地が少なかったので、生活が極めて苦しかった」と振り返っていた。

20歳を過ぎた頃、苦しい生活を抜け出すために、Aさんは出稼ぎに出ていった多くの人たちのように、出身地の山東省から「関東」⁽⁸⁾、いわゆる満洲にやってきた。当時、主に山東省、河北省、河南省、山西省などの地域

(8) 関東というのは長城の東のはずれである山海関より東の地区を指している。

は、人口の過剰、土地不足、そして自然災害の多発などの原因により生活基盤を失った人々が、満洲へ生活のつてを求めてやってきていた。満洲にたどり着いた A さんが、最初に落ち着いたのは佳木斯（ジャムス）という町であった。A さんはそこでレンガ作りや荷物の運搬などの仕事についていたという。その後、鶏西の炭鉱で石炭を掘るなど、東北の奥地で働きまわった。

A さんが、28 歳だった頃、中和開拓団で働いている同郷者から「中和開拓団で働かないか」と誘われた。「炭鉱での労働は厳しい。そして、その頃には労役が頻繁に割り当てられる」ため、A さんは「日本の開拓団に居れば強制労働は避けられる。生活も保障できる」という判断から中和鎮にやってきた。

日本人に認められた A さんの仕事ぶり

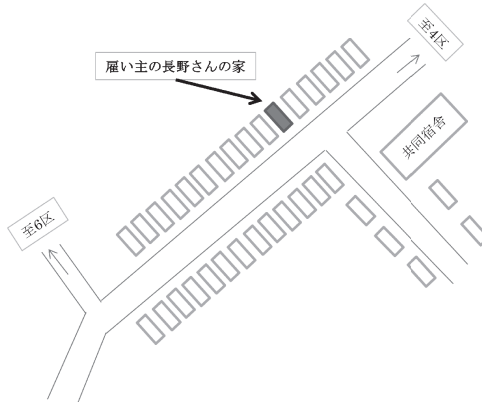
A さんは中和開拓団 7 区の長野さん（仮名）の家に「長工」⁽⁹⁾ として雇われた。7 区には日本人が雇っている中国人労働者たちのために「共同宿舎」を設けていた。A さんはそこに住み込んで、雇い主の長野さんの家に通いながら、働き始めた（図 3 を参照）。

当時、長野さんの家は約 8 町歩の畑、1 町歩の水田を所有していたと、A さんは記憶していた。水田は「朝鮮人」に貸し出し、小作料を徴収するという形をとっていた。A さんは主に畑の仕事を任された。毎日の農作業は、春に馬で畑をすき起こしてから、大豆、トウモロコシの種を撒くこと、夏に畑の雑草を取り除いてから耕すこと、冬に薪をとることで、これらの作業は一年中ずっと繰り返されたという。

その頃、A さんは若くて働き盛りだった。開拓団のなかでもよく働くと、日本人からの評判が良かった。7 区には約 8 人の「長工苦力」が働いていたというが、そのなかでも、A さんの仕事ぶりが最も認められていた

(9) 住み込みで働き、常雇いのことを指す。

図3 中和開拓団7区の略図



と語る。

中和開拓団の部落ではどこに行っても、日本人が話をかけてくれるし、他の日本人の家に農作業の道具などを借りに行った時も、すぐに貸してくれるんだよ。他の中国人はだめさあ、相手にもしてもらえなかったこともあった。

長野さんの家では、一匹気性の荒い日本馬を飼っていた。暴れだすと、誰でもとめられない。農作業にも役立たなかったため、長野さんは困っていた。その時、わしが馬を川沿いの森へ連れ込んで、馬を木に縛りつけて、むちうって、調教した。それで、馬は、わしを見る度に怯え、わしのいうことを聞くようになった。

このように、日本馬はAさんが調教したので、農作業に使えるようになった。こうした仕事ぶりにより、いち早く開拓団の日本人たちに認められたという。

農繁期の時の畑の雑草とりは最も重要な仕事の一つである。しかし、8

町歩の畑は、Aさんと長野さんの二人だけでは間に合わなかった。7~8人の「短工」という日雇い労働者を雇って、すきで雑草をとってもらう。Aさんは雑草をとったあとの畑にうねを立てた。日照が長い満洲の地で農作物の水分を保つためである。Aさんは満洲の栽培技法に慣れていない開拓団の日本人にも、時にはアドバイスをしていたという。その時の様子を、Aさんは次のように語る。

長野さんの家の畑にうねを立てる作業をやっていた時、隣のOGさんはうねの間のくぼみの深さも知らず、あんな浅いうねを立てたんだよ。それを見た私は彼に「それで芽が出るものか、あんな浅くて、水分がすぐ蒸発してしまう、芽が出るわけがないだろう」と冗談を交えながら、OGさんに話をかけた。OGさんは私に「じゃ、どうすりゃいいのかい」といった。わしは「すきを固定していたネジをはずして、深く掘れるところに位置を変えるといい」と、OGさんにいった。OGさんはわしのいった通りにすきの位置を変えた。そうしたらうまくできた。その頃は、開拓団の日本人と仲が良かったよ。

その頃、Aさんは、「どうせ仕事だから、やるならいい仕事をする。認められるとそれは何より嬉しいものだよ。これもだめ、あれもだめ、そういうふうにいわれると、気持ちが悪いし、給料もたくさんもらえないし、雇い主にも不満を持たせるし」という価値観を持ちながら、懸命に働いていた。こうしたまじめな仕事姿勢により、開拓団の日本人から信用を得ていた。そのことについて、Aさんは次のように語る。

時々、長野さん家のすぐ隣にいた長野さんの叔父にあたるYYさんに呼ばれて、よく一緒に酒を飲んだりしていた。YYさんは7区が一番えらい人だった。雇った「苦力」がしっかりと働かないと、YY

さんにたたかれることもしばしばあった。以前、長野さんの家に馬家屯出身の李という人がいたけど、仕事があまりできなくて、よくYYさんにたたかれていた。YYさんは私が長野さんの家で働き始めてから仕事を認めてくれて、よくしてくれた。

Aさんが一生懸命働いた結果として、日本人に信頼され、互いに良い関係を築いたことが伺える。しかし、Aさんは雇い主長野さんの家に対する不満も抱いていた。それは、1944年頃、長野さんが徴兵されたあと、妻と二人の幼い子供が家に残され、家の畑の農作業はすべてをAさん一人に任されたことである。「時々、長野さんの妻清子さん（仮名）に少ない給料でキツイ仕事をさせられた」ので、Aさんはそこで働くのが嫌になって、何度もやめようと考えていたという。しかし、YYさんに「お前がやめたら、畑は全部荒れちゃうし、あの暴れ馬は誰にも使いこなせないし、母子三人だけの家庭だし、何とかしてもらえないのか」と頭を下げられた。それを受けて、Aさんは終戦まで清子の家で働き続けた。

日本の敗戦を迎えて

1945年8月頃、Aさんは普段通り共同宿舎を出て、長野さんの家の畑に向かった。しかし、いつもにぎやかな畑は大変静かだった。Aさんは「変だなあ」と思いながら、7区に駆けつけた。そこで目にしたのは、開拓団の日本人たちが荷物を詰め込んだり、おにぎりを作ったりして、慌ただしい様子であった。

Aさんは7区の様子を見に行ったその時に、YYさんに行き合った。その場でYYさんに「日本が負けたから、私と一緒に逃げましょう」といわれた。Aさんは、日本人たちと一緒に逃げるつもりはなかったのに、混乱の機会に乗じて7区を出ることになった。

日本人が現地の開拓村を出てから幾日か経ったあと、Aさんが7区に戻ってみると、宿舎を含めて7区の建物はほとんど現地の中国人、「朝鮮人」

に焼き払われていた。自分が住んでいた宿舍も焼かれていて、泊まる場所もなくなってしまった。そのため、Aさんは7区から4キロ離れた集落の一つ、亮子屯にいる友人への助けを求めに行った。そこで、一間の藁葺きの家を借りて、新たな生活が始まった。

残留日本婦人を助け、そして「結婚」へ

Aさんが、亮子屯に住みついた数ヶ月後のことであった。亮子屯から約55キロの方正県日本人収容所から「雇い主の奥さんの清子さんが困っている、助けてほしい」という連絡が入った。この頃、清子さんは方正県日本人収容所で極限的な状況に置かれていた。その時の状況について、清子さんによって戦後に書かれた体験記のなかには次のように綴られている。

そこで食べていたものは、コーリャン、アワなどの皮をむかないもので、これを鉄カブトのなかで毎日突いて皮をむき、どうにか飢えをしのいでいましたが、お腹を壊す人が続出して大変でした。ここで長男はハシカになりましたが親の熱で温めるよりほかに仕方ありません。ハシカがのどにきて苦しみ、抱っこしている私を押しやり、むしりついたりして苦しみながら息を引き取りました。次男は体が弱かったので、飢えや寒さに勝てず、それほど苦しむことなく亡くなりました。

一人になってしまった私は、生きられるところまで生きなければ、こんな苦しい思いをして亡くなった子供のことを誰にも知らせることもできない、子供の供養のためにも生きたいと思うようになりました。(清子さんの手記より)

Aさんは、終戦前に稼いだお金を持って、歩いて方正県に向かった。現地に着くと、「倉庫のようなところで、ちゃんとした寝る場所も食べ物もなかった。かなりの数の日本人が冷たいコンクリートの上で寝泊りしてい

た」という光景を目にしたという。たくさんの避難民のなかから清子さんを見つけ出し、用意したお金を渡した。助けに来た A さんに会った清子さんは何も話さなかった。ただただ泣くだけだった。「そのお金で難関を乗りきるといい」と心のなかで思いながら、A さんはまた中和鎮に戻った。

その後、1945年12月末まで方正収容所で避難していた中和開拓団は、そこでは越冬できないという判断で団全員は中和鎮に戻るという決断した。清子さんは中和開拓団と一緒に中和鎮に戻る時、寒さ、飢えにさらされ、着いたとたん発疹チフスにかかった。そこで、また A さんに命を助けてもらった。清子さんが回復すると、隣の友人の仲立ちによって A さんと結婚することになった。この結婚について、清子さんはこう振り返る。

長い間世話になり、そこから逃げ出すわけにもいきません。仕方なく「妻」ということになりましたが、それでも引揚げがあったら日本に帰りたい気持ちでおりました。悔しくて、悔しくて毎日泣いていました。(清子さんの手記より)

そのうち、A さんと清子の間に男の子二人と女の子一人が生まれた。東北地区が解放されてから1946年に土地改革が行われ、その時 A さんは約3町歩の土地を与えられた。家庭を持った A さんは、朝から晩まで汗水たらして働いていた。その頃の生活はそれほど豊かではなかったが、まずまずの生活であったという。しかし、この静かな生活は、1953年の清子さんの引揚げにより、大きな波紋を投げかけられた。

離別、そして再会

1953年、残留日本人の集団引揚げが再開した。A さんには、清子さんが日本に引揚げるとは思いもよらなかった。清子さんは引揚げる前日に「明日日本に帰る」と A さんに告げた。あまりにも突然のことに A さんは戸惑った。やっと生活が安定するようになり、三人の子供ももうけていたの

で、「妻」が日本に帰ることが理解できなかった。しかし、Aさんは「妻」を止めようとしなかった。その時の気持ちを、Aさんは次のように振り返る。

どう思ったって、仕方がない。帰りたいといっているんですから。止めるわけにいかないし、私はまだこの地で生きていかなければならなかった。この村には、彼女を含めて五人の日本人婦人がいた。ほかの四人は誰も帰らなかった。彼女だけが帰った。仕方がない。

一方、日本に帰りたい清子さんの気持ちは次のようなものであった。

最後の引揚げがあると知らされ、日本の身内からは手紙が来るし、子供はかわいいし、どうしていいかわかりません(でした)。しかし、私は決心しました。一生、敗戦国民といわれて暮らすのはとても耐えられないので日本へ帰る手続きをしました。(清子さんの手記より)

出発日、清子さんは生後まもなくの娘を連れて、6歳と4歳の二人の息子をAさんとともに残し、村をあとにした。町の引揚げ集合場所に着いて、車に乗ろうとしているところ、ある中国人夫婦に「私に子供をくれませんか」「私に子供がいなくて寂しくて困る。大事に育てるからぜひ頼む」(清子さんの手記より)とせがまれた。「三ヶ月の子供を連れて帰るのも不安だし、その女性が私のそばを離れないので思い切って預けることに決めました」(清子さんの手記より)。その後、清子さんは一人で日本に引揚げた。

村に残ったAさんは、その後、人民公社、大躍進、文化大革命といういくつかの時代を経て、一人で二人の幼い子供を成人まで育てた。日中国交が回復したあと1974年に、音信が途絶えてから19年目に清子さんから一

通の手紙が届いた。しばらくの間、手紙による連絡が続いた。80年代初期には、Aさんの長男と長女は日本への短期訪問もできた。1990年、長男一家は日本に移住した。

2000年、Aさんは日本に永住した長男の家を訪ねた。はじめての日本だった。清子さんと約半世紀ぶりに複雑な思いのなかで対面することとなった。約1ヶ月間の日本滞在を終えてから、Aさんは中国に戻り静かな暮らしを送っていた。

2-2. 満洲国の「協力者」として—— Bさんの事例

日本の教育を受けて

Bさんは、1927年12月20日に延寿县東華区で生まれ、2004年にインタビューした時点では78歳だった。Bさんは農家の出身で、4人兄弟の長男であった。当時の家庭は両親、長男であるBさん、姉が一人、弟が二人、合わせて6人家族であった。

9歳の時にBさんは私塾に入り、そこで2年間くらい孔子や孟子の思想について勉強していたという。その後、日本は満洲に対する支配基盤を徐々に固めてから、日本語などを導入し、東北部における日本の同化教育が進めた。当時は植民地言語教育の一環として、国民高等学校の教育プログラムでは日本語と中国語とモンゴル語が「国語」と定められていた。旧来の伝統教育はすべて廃止されることとなった。それまでに私塾を通っていたBさんは、私塾から当地の「公安小学」校に移らせられ、約4年間日本の教育を受けていた。

Bさんは当時受けた日本教育について、「日本語の授業は週に6回あって、1日1回、1回の授業は1時間程度だった。そして1時間のなかで45分間日本語について勉強し、残り15分間はゲームなどをする」時間もあった。また、「同級生は全員漢族の人であって、他民族の人は一人もいなかった。先生は日本人の先生ではなく、「朝鮮」出身の先生でとても厳しかった。授業中、中国語は一切禁止されていて、中国語を喋ってしまったら、ひど

い体罰を受けさせられた」という記憶が鮮明に残っている。このように、Bさんは公安小学校で4年間、日本の教育を受けた。家庭の生活が苦しかったため、小学校を卒業してから、中等学校に進むことができなかったので、農業に従事している両親を手伝っていた。

強制労働の経験

1937年、日中戦争が始まったことで、日本は労働力が決定的に不足することとなった。翌年1938年4月の国家総動員法の制定、そして1941年の太平洋戦争突入などにより、朝鮮、台湾、満洲において多くの農村労働力を鉱業、軍事基地の建設などに強制的に動員した。このような背景において、Bさんは卒業してから16歳の頃に、延寿県に入植してきた中和開拓団が水田を灌漑する用水路を建設するために、県内から強制労働させられた大量の中国人の一人であった。その時の徴用は、二つの方法があったとBさんはいふ。一つは、徴兵に合格できない人、いわゆる「満洲国兵」⁽¹⁰⁾に不合格の人が兵役の代わりに3年間強制労働をさせるというものであり、もう一つは、県の勤労奉仕係が国家総動員法の一環として、「勤労奉仕」という名目で各町村に割り当てられ、短期間の労務をさせるというものであった。その頃は、Bさんはまだ徴兵の年齢に達してなかったが、勤労奉仕隊の一員として、用水路の建設に強要された。その時の様子を聞いてみると、Bさんは少し荒い声で次のように語る。

すぐそこよ、(慶陽農場の)第四作業区⁽¹¹⁾の西にある李花屯河だよ(写真1を参照)。あの時は、私はまだ16歳だったと思う。もう10月末の頃かね、寒くてね、河の底も凍っていて、骨を刺すような冷たい水のなかに素足で入って掘らなければならなかったんだ。寒さに我慢できずに突堤に上がると鞭で雨のように打たれた。

(10) 日本軍を協力する満洲国政府の兵士のことである。中国では「偽軍」ともいう。

(11) 第四作業区は当中和開拓団の8区であった。

写真1 当時造られた用水路



(この場所は当時中和開拓団8区だった、2005年4月2日筆者撮影。)

当時16歳だったBさんにとって、このような厳しい労働条件で強要されたことは、人生のトラウマとなった。その体験と記憶は彼の人生と共に生き続け、引きずっていると思われる。中和鎮に入植した信濃村開拓団のための用水路建設は、全県から中国人労働者が集められて、約300人～400人が徴用されているようだったという。現場で監督の役を務めたのは「朝鮮人」だけだったと、Bさんはいう。現場の様子について、Bさんは「あんな冷たい河に入ったら、足の感覚がすぐなくなってしまいます。どんな丈夫な人でもすぐやられる」。さらに、現場監督だった「朝鮮人」たちに対しては次のようにいう。「朝鮮人が一番悪い。彼らのご都合主義の人たちだった」。しかし「その時は本当に仕方がなかったんだ」。

Bさんがいう「仕方がない」は、植民地の強権統治には正面から抵抗ができないという意味と読み取れる。支配される社会の末端に置かれているBさんのような人々は、支配国である日本に抑圧されただけではなく、他民族、自民族からも幾重の抑圧も受けなければならなかった。このことに

ついて、Bさんは次のように語る。

16歳になると国民手帳を与えられる、それを持っていないと浮浪者とみなされるから、すぐ捕まえられる。捕まえられたら、炭鉱へ、炭鉱に送られるんだ。少なくとも2~3年強制労働をさせられるんだ。炭鉱に行かされたら、もう生きて帰ってこられないぞ。

支配者の日本に協力する中国人による抑圧もものすごく多かった。延寿県の勤労奉仕股二中隊に閩という副隊長がいた。彼はわれわれと同じ漢族の人だったが、彼が一番残忍な人だった。強制労働の命令に従わない、行かないとすぐ逮捕されちゃうし、矯正院に送られるんだ。しかし、行けば生きて帰れるかどうかもうわからない。中和開拓団の用水路を建設した時に、生き残った人が少なかった。元気に生きて帰ってこられた人はほとんどいなかった。現場で病気になっても、相手にされずに治してもらえないし。人間じゃないよ。死んだら、そこらへんに放り出され、野良犬に食いさられてしまう。

ここでBさんが語ったように、当時、中和開拓団の用水路建設時の極限的な労働状況のなか、多くの労働者が命を落とした。そして、そうした悲惨な状況を言い表す歌のような言葉は、日本の敗戦後に生き残った労働者たちの間で伝えられてきた。戦後60数年を経ても、Bさんはその言葉を忘れていない。

日本鬼子真狼肠 日本の侵略者は本当に腹が黒い
李花屯把大河挖 (冬でも) 李花屯の河を掘らされた
冻得群众泪连连 民衆に涙が出るほどの寒い思いをさせ
筋断骨折没人管 筋が切れても骨が折れても相手にしてもらえない

上記の言葉について、Bさんは「これが、強制労働で辛い経験をし、そして亡くなった人々のため、ある種の追憶であり、また日本による侵略の歴史を記録することでもあった」と説明する。

満洲国の「協力者」として

強制労働をさせられたBさんは、二度と「勤労奉仕」に行きたくないという切実な思いから、いかにして強制労働に割り当てられないかを考えていた。そこで、Bさんは日本の教育を受けたことを利用し、知り合いである「偽満官吏（満洲国政府に協力する中国人官僚）」を通じて「村公所（村役場）」の「傭員（臨時職員）」として働くようになった。その経緯について、Bさんは次のように語る。

どうすれば強制労働を避けられるのかをずっと悩んでいた。その頃は、おやじがアヘンの依存者だったので、同じ「煙館（アヘンを飲ませる店）」に通うある偽満官吏と親しくなった。その偽満官吏が地元の有力者だったから、おやじが彼に「何とか家の息子が労役を避けられるような方法はないか」と相談したのだ。そして、彼の紹介で私は村公所の「傭員」になったのだ。

このようにして、Bさんは村公所の「傭員」として、日々雑用や使い走りなどをして働き始めた。これにより、Bさんの状況は一転した。いつか労役を割り当てられるという不安と恐怖から脱出し、これまでの支配される側の立場から満洲国の協力者へと変わった。このことについて、Bさんは「何より強制労働から逃れたかったからだ。そうしなければ、何度も死んでいたはずだ」と語っていた。

Bさんは「庸員」になってからまもなく、「雇員」（旧時、給料の一番低い職員のこと）に昇進した。そこで、Bさんに任された仕事は、主に労務および戸籍などの管理であった。具体的には、管轄する地域の各所帯に労務

を割り当てるといふ労働力の調達、徴兵の年齢に達しているか否かに関する戸籍の管理、そして勤労奉仕のための短期間労働人員の徴集、豚の皮や麻などの軍需品を造る原材料の徴取に携わっていた。こうした満洲国を支配する側に協力したことを事実としながらも、Bさんは自分は決して村人を苛めたり、強要したりするなどはしなかったと語る。その理由を、Bさんは次のように語る。

わしはこの仕事を約二年間やったけれども、村の人々に対して威張ったりいじめたりしたことはなかったよ。この仕事を始めた時に、おやじから三つ注意をいわれた。1) 勝手に人に食事をおごらせないこと、2) 権勢に頼って貧しい人たちをいじめないこと、3) 女性に近づかないこと。わしはおやじにいわれたことをきちんと守っていたよ。もしあなた(筆者)がこのことが信じられなければ、私が昔住んでいた東華村に行って聞いてみればいい。わしが彼らに協力したことは事実だが、本当は使役を逃れるため、生きていくためだった。

ここで見てわかるように、Bさんは満洲国の協力者になっても支配する側と同調して、村の中国人たちを圧迫するようなことはしなかったと強調している。さらに、Bさんは次のように語り続けていた。

わしは労役の辛い体験を味わったことがあるからこそ、できるだけ村人たちに私と同じような苦しい思いをさせたくなかったんだ。だから、警務の人と一緒に各家に回って労働力を調達しに行く前には、こっそりと労役に割り当てられる人に逃げるかあるいは隠れるようにと連絡して置くんだった。そうすれば、警務の人たちと一緒に当人を連行しに行った時には、もう家にはいなくなっているから。

これは日本による中国の東北社会に対する植民地統治がもたらした支配と被支配という社会構造において、Bさんはより良い個人の生活、安定な暮らしを求めるための限られた生の選択(抑圧されるかまたは協力するか)を利用したのであり、何とか生きようとしたのである。

Bさんは、1943年から1945年までの約2年間、村公所で働いていた。日本の敗戦による満洲国の崩壊で、Bさんの村公所での仕事はなくなり、本来の生活に戻った。延寿県は、日本の統治から解放されても、しばらくの間混乱が続いていた。1946年1月、東北民主連軍が県内に進駐し、国民党の反対勢力を打ち破って延寿県を解放した。同年6月、延寿県で土地改革運動が始まった。土地改革は主に都市や農村における封建社会の勢力を壊し、旧時の土地所有制度を廃止し、広範な貧しい農民たちに土地を均等に与え、徹底的に「翻身」することで真の国の主人公となる、ということであった(王玉卿2003:114)。そこで、運動の原則として共産党の晋察冀中央局が発する「五・四指示」に従い、雇農や貧農たちを団結させ、土地を持っている地主、漢奸、悪ボスなどと徹底的に闘争するようになった。そのなかで、かつて満洲国時代に偽満警察だった人やBさんのように偽満政府に協力した人なども清算の対象となった。幸いに、Bさんは先に述べたように、支配する側に立ちながらも、村の中国人たちの味方をしていただかげで、その難を免れたという。

その後、1949年に新中国が建国されたあと、Bさんは延寿県手工業連合社の傘下にある赤レンガ工場に勤め、レンガ造りの技術を習得した。1955年、Bさんは技術者として慶陽農業に赴き、慶陽農業の赤レンガ工場の立ち上げに携わった。工場が建設されてからも、Bさんは慶陽農場に落ち着き、現在に至っている。

2-3. 開拓団の日本人は優しかった——Cさんの事例

Cさんへのインタビューは、2005年に中和鎮の養老院で行った。Cさんはずっと家庭を持つことなく、1949年に中国が建国されたあとは、生産隊

で働き、年をとってから地元の中和鎮養老院に入り、老後生活を送っている。

1920年、Cさんは中和鎮から十数キロ離れた致富屯に生まれた。両親は代々農業を営んでいた。しかしCさんが15歳になるまでに両親は相次いで病気で亡くなった。生活のために、Cさんは弟を連れて中和鎮へ出稼ぎにやってきたという。

筆者：中和鎮に来てからの生活はどんな感じだったですか？

Cさん：地主の家の作男だった。両親とも亡くなったので、あっちこっちの地主の家で豚飼いとか、雑用などをして、そうやって食いぶちを稼いでいた。

この語りで示したように、Cさんは、中和鎮に来てから、中国人の地主の家を回って豚飼いなどをしながら生活をしてきた。そのような暮らしのなか、1938年に中和開拓団の本隊が中和鎮の周辺に入植し、1941年に中和開拓団が個人経営に移行すると、これまで中国人の地主の家で働いていたCさんは、開拓団の日本人の家で働くようになったという。

1941年から、Cさんは中和開拓団の日本人に雇われ、1945年の終戦まで約5年間働いた。はじめは、中和開拓団2区のXSさんという人の家で一年間くらい豚飼いをしていた。その翌年から日本の敗戦までは、3区のUKさんの家で畑の手伝いなどの農作業をしていた。中和開拓団の日本人に雇用された時の生活の様子について、Cさんは、部落の中には「苦力」たちの小屋があって、そこに住み込みというような形で朝から畑に出て、夕方に帰ってきて、夕飯を済ませたら休憩するという暮らしを数年間繰り返していたと語る。

仕事は、主に畑での大豆やトウモロコシの栽培であった。夏には雑草をとったり、畑を整地したりしていた。冬の農閑期には、雇い主の家の燃料を確保するために、近くの山へ薪を集めにいったという。このように、C

さんは終戦までに中和開拓団で数年間働いた経験があった。そういった生活のなかで開拓団の日本人との接触について、Cさんに聞いてみた。しかし、Cさんは当時のことをあまり記憶していなかったため、具体的なエピソードなどを語るができなかったが、二人の日本人の家庭で働き、日本人の雇い主によくしてもらったことを断片的に語った。

筆者：開拓団の日本人の家庭で働いていたことについて、何か印象に残ったことがありますか？

Cさん：とにかく「掌柜的（雇い主）」はよくしてくれた。その頃、私は弟が一人いたので、弟にも食べさせなければならなかった。でも、私一人の稼ぎでは弟の面倒を見るのが苦しかった。私を使ってくれたXSさんは私の兄弟たちに時々食べ物や着るものを援助してくれたよ。

Cさんは、部落のなかで日本人と会った時には、日本人たちは「Cさん、Cさん」と呼ばれた。中和開拓団で5年間働いていたが、いじめられたことがなかったという。特に農作業を行う時には、雇い主のUKさんや奥さんも一緒だったり、時折、性格が明るいUKさんの奥さんが冗談をいってくれたりして、仲良く仕事をしていたということを回想しながら、Cさんはさらに次のように語り出す。

開拓団で出会ったXSさんとUKさんは本当に優しかった。自分の家庭でおいしいものを作るたびに、いつも子供たちを呼んで「苦力」の私たちにも届け、食べさせてくれたんだ。

Cさんが語ったのは、日本人たちによくしてもらったという自らの体験に基づいたものである。こうしたCさんの話から、筆者はCさんに、開拓団が持つ侵略の側面について聞いてみた。

筆者：日本の開拓団が中和鎮にやってきたことで、現地の人々に多大な影響を与えたと思うが、それについてと思われませんか？
Cさん：その時は、そんなのを考えたことがなかったさあ。だって、どうやってあしたを食いつなぐのかで精いっぱいだった。

以上で示したように、Cさんは、約5年間中和開拓団で働いた経験を思い出しながら、日本人との接触について語ってくれた。ここでわかるように、彼の語りはあくまでも日本の植民地政策による支配と被支配の関係を抜きにして、個々の付き合いのなかで形成された人間関係を出発点としたものであったのである。

3. 支配される現地社会に関する考察

以上のように、本論はかつて中和開拓団と直接または間接にかかわっていた現地社会を生きてきた三人の老人への聞き取り調査を通して、彼らがどのように日本の植民地的支配に置かれた中国東北社会を生きてきたかを述べてきた。ここでは日本による満洲への植民地的支配が行われるなかで、調査地である延寿県の状況に即して考察してみよう。

1932年に満洲国が建国されてからまもなく、吉林省公署⁽¹²⁾は二百十号訓令を公布した。その内容とは「従来ある各県は、公布の当日から三日後までにすべての県政府を県公署と改称する」(姜学2003:49)というものであった。また、同年7月に公布された『自治県令』には、「参事は県長を補佐し、県の行政に参画する」という条項が設けられた。これらの措置により、1933年に延寿県の県長は李春魁という中国人が任命され、参事官には鈴木三蔵という日本人が赴任してきた(姜学・張全本2003:39)。このように、1933年以降、延寿県は実質的に日本の統治下に入った。

(12) 1932年に満洲国が建国された当時には、延寿県は吉林省に直轄するが、1934年に滨江省に合併された(中国県情大全総編委員会編集部1991:629)。

1933年から1945年までに日本の支配下に置かれた延寿県に、日本から四つの開拓団が送られてきた。この四つの開拓団は、本論で取り上げた1938年に入植した中和開拓団のほかに、1941年に李花屯に入植した長野県小県郡（現在の上田市）開拓団、1942年に長発村に入植した奈良県大塔村開拓団、そして1943年に宝興村に入植した長野市を送出母体とした転業婦農開拓団であった。終戦時に延寿県内には1919人の日本人が在留しており、そのうち、開拓団の関係者は1799人を占めていた（木島三千男編1986：32）。

こうした日本人の入植は、現地社会に大きな影響をもたらしたのはいうまでもないが、そのなかでも日本人移民の用地を獲得するために、現地人の土地を廉価で買い上げたこと、入植してきた開拓団に中国人の民家を提供するため不法占拠したことなどによる被害が最も多く報告されている。ここで紹介した延寿県に入植してきた四つの開拓団もほとんど既墾地に入植し、満拓公社が彼らのために現地人の家屋を買い取っていたことが、『長野県満洲開拓史』や『奈良県満洲開拓史』などの日本側の資料から読み取れる⁽¹³⁾。また、現地の延寿県の档案館に所蔵してある「偽満時代の延寿県における日本の経済略奪」（以下「延寿偽満期文史資料」と称する）という資料にも、本県に入植してきた開拓団による現地人に対する土地の略奪、飛行場や用水路などの建設のための勤労奉仕による労務者の調達・徴集、そして強要された糧穀出荷および物資などの供出などといった側面による被害をより広範に記録している。

従って、こうした日本による植民地的支配の政策が、それまで維持されてきた現地社会の仕組みを乱すだけではなく、そこに暮らす人々の生活も規定した。満洲国期の延寿県は、手工業や工業、商業などがほとんど発達していなかったため、多くの人は農業で生活を営んでいた（延寿偽満期文史

(13) 中和鎮信濃村開拓団、李花屯小県郷開拓団、宝興村長野郷開拓団、長発村奈良県大塔村開拓団は既墾地に入植したということについて、それぞれ『長野県満洲開拓史（各団編）』の138頁、396頁、519頁、『奈良県満洲開拓史』の77頁に記録されている。

資料編集委員会 1988：36-39)。そうした農業に従事する現地の人々は、主に(1)地主、(2)富中農、(3)貧雇農という三つの階層となっており、本章で取り上げた三人の事例は(3)貧雇農の階層に位置づけることができる。この時期において県内の土地は、ほとんど(1)地主と(2)富中農に集中されており、土地全体の67.5%が地主や富中農によって所有されていた（延寿県地方志办公室編 1991：123）。

一方、開拓団の入植ともなって、地元の地主や富中農を中心に、彼らの土地が日本人の移民用地として買い取られて、彼らは自分の土地から離れざるを得なくなった。これに連動して、それまで地主や富中農から土地を借りて、あるいは地主や富中農の小作人として生活を営んでいた貧雇農が生活できなくなったり、働く場を失ったりすることとなった。そこで、生活を求めて故郷を離れていく者もいれば、開拓団の日本人家庭の小作人になった者もいた。先に紹介した A さんや C さんの事例からわかるように、元々土地をほとんど持たない貧雇農だった彼は、より良い生活を求めると同時に「労務の供出を避けるため」や「生きていくため」という動機が加わり、開拓団の日本人の家庭で働くようになったと思われる。

上記の C さんと A さんの二つの事例に対して、B さんの事例では、直接開拓団のなかで働いていた経験がなかったが、中和開拓団の用水路を建設するにあたって、労役を割り当てられた。「延寿偽満期文史資料」によれば、日本人移民者が延寿県に入植してから、神社の建設や開拓団の水田整備による用水路の建設のために、県内から大量の労務人員を偽満延寿政府は徴用し、現地の多くの人々が被害を受けたと記述されている（延寿偽満期文史資料編集委員会 1988：46-53）。1935年から1945年までは延寿県の人口が二回にわたり減少したという記録があり⁽¹⁴⁾、その理由が「日本の侵略者による殺戮、偽満洲国政府による搾取や労役および自然災害など」（延寿県

(14) 満洲国期における延寿人口の減少は、1934年から1935年までに137106人から106477人となり、そして1944年から1945年までに161860人から154889人となったという記録がある（延寿県地方志办公室編 1991：623）。

地方志办公室編 1991：623）とされている。

満洲国期における延寿県という現地社会が、日本による植民地的支配と搾取に翻弄されていた。そして、そうした支配と被支配というマクロな構造のなかに、本論で取り上げたような、あまり問われることのない、多様でミクロな個別の体験も存在していたことを示した。

4. おわりに

本論では、日本の満洲に対する植民地的な統治の過程における現地社会に暮らす現地の人々の経験を通して、彼らとそこに入植してきた日本人の入植者との相互関係を検討してきた。

現地社会を生きる現地の人々にしてみれば、日本による植民地的支配に規定されながら生きていかなければならなかった。本論の事例を見てわかるように、Aさんが佳木斯（ジャムス）から中和開拓団で働くようになったのは、厳しい労役に割り当てられるのを恐れていたからである。開拓団で働けば、労役を逃れられるほか、収入や衣食住も保証されるということが、開拓団で働く決め手となった。これに対して、ここでは支配者側に立つ日本人の入植者はどのように語っているかを見てみたい。筆者による中和開拓団元団員へのインタビューのなかで、彼らが「喜んでくる」、「彼らは仕事がないんだから」、「日本人のほうが、食べ物をつっぷり食べられる。金をちゃんともらえるから」という語りを得ている⁽¹⁵⁾。比較してみれば、両者の思いが必ずしも一致していないことがわかる。日本人の入植者が語ったような「彼らには仕事がない」、「喜んでくる」などという理由は、Aさんが開拓団で働く動機の一側面に過ぎなかった。

また、Bさんは中和開拓団の用水路の建設に勞工として駆りだされていた。過酷な労働現場から生き残った彼は、いつ再度労役に割り当てられる

(15) 詳しくは、拙著（2010）『「満洲移民」の歴史と生活体験』102頁を参照されたい。

のかという不安な暮らしを解消するために、父親の知り合いだった偽満官僚の紹介を通して、支配側の「協力者」として区公署で働くようになった。このような A さんや B さんの事例から、彼らは日本による現地社会への植民地的支配という重圧のなかで、より「安定的な生活」を求めるために、限られた生の選択を利用し、何とか生きようとしたことが読み取れる。

一方、日本人移民者と個々の付き合いにおいて、直接かかわったのは、A さんの事例と C さんの事例である。「部落のどこにいても日本人が話をかけてくれる」、「どの日本人の家に行っても農具などを貸してもらえ」、「日本人が食べ物や着るものを援助してくれた」、「日本人は優しかった」という二人の語りから見てわかるように、日本人と個々のレベルの付き合いには対立の関係がなく、相互が非常に良い関係を築いていた側面が伺える。また、こうした個々の付き合いは敗戦後も続いていたことが、A さんの事例から確認できる。さらに、こういった現地の人々は日本人との関係を語る際にほとんど植民地という支配と被支配の社会構造を抜きにして、個々の接触体験に即して語っていることがわかる。彼らの視点に即してみた場合は、個々の付き合いの裏には、マクロな植民地の社会構造による抑圧も同時に存在していたことが明らかとなった。

参考文献

- 蘭信三（1994）『「満州移民」の歴史社会学』行路社
猪股祐介（2002）『「満州移民」の植民地経験——岐阜県郡上村開拓団を事例として』『相関社会科学』第12号
王希亮著（1990）『日本对中国東北的政治統治 1931—1935 年』黒龍江省出版社
王玉卿（2003）「延寿土地改革運動」姜学編『延寿之歌』中国戏剧出版社
延寿县伪满期文史資料編集委員会（1988）『伪满时期日本对延寿县的经济掠夺』延寿县档案馆
延寿县地方志办公室編（1991）『延寿县志』中国三环出版社
姜学編（2003）『延寿之歌』中国戏剧出版社

- 姜学・張全本整理「延寿县历任县长，县长更迭表」姜学編『延寿之歌』中国戏剧出版社，pp. 35-45
- 姜新志（2003）「延寿史话」姜学編『延寿之歌』中国戏剧出版社，pp. 3-11
- 木島三千男（1986）『満州 1945』地久館
- 元弘基・張一新（1998）「延寿県朝鮮族概況」『延寿文史資料』第六号
- 厚生省社会・援護局監修（1978）『引揚げと援護三十年の歩み』ぎょうせい
- 高楽才著（2000）『日本「満洲移民」研究』人民出版社
- 慶陽農場誌編審委員会（2002）『慶陽農場誌（1947-1985）』（内部資料）
- 坂部晶子（2008）『「満洲」経験の社会学』世界思想社
- 孫継武・鄭敏主編（2002）『日本向中国東北移民的調査与研究』吉林文史出版社
- 中国県情大全総編委員会（1991）『中国県情大全』中国社会出版社
- 趙彦民（2006）「ある中国残留孤児のライフ・ヒストリー」『アジア遊学』（第85号）勉誠出版
- 趙彦民（2007）『満洲愛国信濃村の生活——中国残留孤児達の家族史——』三重大学出版会
- 趙彦民（2010）『「満洲移民」の歴史と生活体験——長野県第七次中和鎮信濃村開拓団の事例を中心に——』名古屋大学大学院国際開発研究科博士学位論文
- 元中和鎮信濃村開拓編（1975）『追憶——あ々中和鎮』〈非売品〉
- 長野県開拓自興会満洲開拓史刊行会編（1984）『長野県満洲開拓史・各団編』
- 長野県開拓自興会満洲開拓史刊行会編（1984）『長野県満洲開拓史・総論』
- 奈良県拓友会（1996）『奈良県満洲開拓史』新風書房
- 満洲移民史研究会編（1976）『日本帝国主義下の満洲移民』龍溪書房
- 依田憲家（1976）「満洲における朝鮮人移民」満洲移民史研究会編『日本帝国主義下の満洲移民』龍溪書房